

まえがき

二〇〇五年三月に東京都の公立小学校教師三十三年間に幕を下ろす。同年八月、私が所属している日本演劇教育連盟主催の全国演劇教育研究会がヒロシマ六十年ということで広島市で開催される。その会場の売り場に私の初めての教育実践記録『いちねんせいードラマの教室』（晩成書房）が並べられた。

あれから四年、相変わらず『演劇と教育』の編集代表として演劇教育の灯を守り育てようと奮闘している。そして、縁あって、埼玉大学の非常勤講師として、この四月で四年目を迎えようとしている。

大学の授業内容は、特別活動論（通年）、生活科指導法（後期）だ。授業時間は九〇分、教育学部一、二年生八十数人が対象だ。当初、机椅子固定の教室で私が目指す演劇教育がはたして展開できるのか、心配だった。しかし、教育という行為にはさしたる相違がないことが実感できた。今時の大学生は小学生のように幼いと悪口を言うつもりはない。年齢にかかわらず〈教育〉の基本はコミュニケーションで、〈ことばと心の受け渡し〉がしっかり取れているかが最も重要だということだ。

しかし顔と名前が一致しない学生を相手にどういうふうな毎時間、応答関係を築くのか。私の最大の課題になっていった。

そこで授業三回に一回ぐらいコメントペーパー（感想文）を書かせることにした。これを始めてから

彼らが何を考えて授業を受けているのかよくわかるようになった。さらに、これを教材にしながら、次の授業では質問に答え、論点になったところを抽出して話すようにした。なかには「赤ペンください。」という学生もいる。もちろん大歓迎だ。

「余り眠くならないような授業をして欲しい。」という感想があつた。待つてました！とばかりにこれに飛びつく。この教室では劇は難しくても、朗読・群読くらいなら何とかなるだろう。小学生と同じように「お祭り」（北原白秋）と「教室はまちがうところだ」（蒔田晋治）をやつてみた。学生の表情が一変した。ほとんどの学生は喜々としてこれらに参加する。しかし、「私は群読はやりたくない。何で大学でこれをやらなければならないのか。」と言う者もいた。これに誠実に答えることが、また授業の核心になっていく。

同じ大学の岩川直樹さんの「演劇と教育」を学ぶということ（「演劇と教育」日本演劇教育連盟編集、晩成書房発行、二〇〇六年七月号）という論考は身体表現教育に大きな示唆を与えてくれる。これを学生への「返信」にする。

「教師自身のことばとことばへの気付きを軸にしながら、学校教育の日常的慣習を吟味するとともに、子どものからだとことばの臨床的な捉え方を土台とした活動的な場づくりをとおして、一人ひとりの子どものアクションが生まれる時をもちたらすこと。演劇と教育を学ぶということは、それらの全体が相互に連関するなかで、人間的アクションの奥行きに参入していくことを意味しているのではないだろう

か。」

さて、この間、日本の教育にとって一大事が発生した。忘れもしない二〇〇六年一月一日、戦後民主教育を支えてきた教育基本法が改悪されたのだ。さらに翌年、国家権力の強化をねらう教育三法（学校の中に副校長、主幹を導入する、教員の免許十年更新制、事柄によっては文科省が直接教育委員会に指示できる）が成立した。時の安部晋三首相はこれだけやって、総理大臣の座からさっさと逃亡したのだった。

さまざまな政府の失態が続くなか、相変わらず「学力低下」が叫ばれる。政治体制が窮地に陥った時、必ずと言っていいほど、教育批判、教師批判が巻き起こる。それは決して文部科学省批判までには行きつかない。常に彼らは安泰であり続ける。

「学力低下批判」はOECDなどの国際学力調査が発表されるたびに噴出する。その内容についてはほとんど精査しないで、単に授業時間の増加、補習授業の設置、宿題やドリルなどの必要性があることに語られる。かつての詰め込み教育批判は影も形もない。実は、日本の子どもたちは科学、数学、読解力のリテラシー（応用力）が低下しているだけでなく、学びの意欲が減退しているということなのだ。冷静な議論になかなかなりにくい。

前著『いちねんせい—ドラマの教室』でも展開した、〈ことばと心の受け渡し〉の教育について、そ

の中高学年版を編んでみた。私が小学生を担当した半分は、最もエネルギーで、おもしろいことを
しでかしてくれるギャングエイジの子どもたちだった。この子たちとの波乱に富んだ、楽しい日々をな
んとしても書き残したいと思った。

教育情況がさらにゆがむなか、日々奮闘を続ける現場の教師や教師の卵たちへの熱烈なラブコール・
応援歌としてこの本を上梓したい。

福田三津夫